

2010年11月25日公開

## 読書案内

### ◆第1章◆

阿川尚之『憲法で読むアメリカ史』上下巻，PHP新書，2004年。

憲法判例の歴史をたどると、アメリカという政治社会の成り立ちやその変遷が見えてくる。アメリカにおける司法の役割の大きさの証しである。

宇野重規『トクヴィル 平等と不平等の理論家』講談社選書メチエ，2007年。

やはり、いつになっても、トクヴィルはアメリカを考えるうえで絶好の導きである。フランスに生まれたトクヴィルがアメリカで何を見つけたのかを探る本。

古矢旬『アメリカ 過去と現在の間』岩波新書，2004年。

「アメリカ的なもの」とは何か。「ユニラテラリズム」「帝国」「戦争」「保守主義」「原理主義」をキーワードにすると、その骨組みが見えてくる。

### ◆第2章◆

佐々木毅『アメリカの保守とリベラル』講談社学術文庫，1993年。

刊行から若干年数を経ているが、アメリカにおける保守とリベラルの思想レベルの整理を丹念に行った書。アメリカに固有な政治的座標軸を理解するためには必読の書。

久保文明編『G・W・ブッシュ政権とアメリカの保守勢力——共和党の分析』日本国際問題研究所，2003年；久保文明編『米国民党——2008

年政権奪回への課題』日本国際問題研究所，2005年。

保守とリベラルを、それぞれの運動を支える人や組織に着目しながら、現実の政治変動と関連づけて考察した書。草の根政治、選挙戦術にまで踏み込み、対立の構図を浮き彫りにしている。

フォーナー，E.著／横山良・竹田有・常松洋・肥後本芳男訳『アメリカ自由の物語——植民地時代から現代まで』（上・下）岩波書店，2008年。

アメリカを「自由を求めるひとつの大きな物語」と定義すると、保守とリベラルの対立も異なった2つの「自由の物語」の対立だということがよく見えてくる。本章との関連では、特に下巻が有用である。

### ◆第3章◆

渡辺将人『現代アメリカ選挙の集票過程——アウトリーチ戦略と政治意識の変容』日本評論社，2008年。

ジャーナリスト出身で、大統領選挙での選挙運動に携わった経験をもつ著者による、アメリカ政治の最前線からのヴィヴィッドな分析。具体的な事例の紹介と分析として、森脇俊雅『アメリカ女性議員の誕生——下院議員スローターさんの選挙と議員活動』（ミネルヴァ書房，2002年）も興味深い。

ルイス，D.著／稲継裕昭監訳・浅尾久美子訳『大統領任命の政治学——政治任用の実態と行政への影響』ミネルヴァ書房，2009年。

アメリカでは、大統領を支える補佐官や幹部官僚の多くは、政治任用という、公務員試験合格などの資格による任用とは異なった方式で採用される。その実態と政策過程への影響を体系的に分析している。

五十嵐武士・久保文明編『アメリカ現代政治の構図——イデオロギー対立とそのゆくえ』東京大学出版会，2009年。

第一線のアメリカ政治研究者が、オバマ政権発足直後までをフォローしながら、アメリカ現代政治のキーワードの1つである「分極化」について、理念から政策変化への影響まで多様に論じている。

### ◆第4章◆

村山裕三・地主敏樹編『アメリカ経済論』ミネルヴァ書房，2004年。

19世紀から21世紀にかけてのアメリカ経済の歩みや、企業経営・医療・財政・金融システムなどの、アメリカ経済に関するさまざまなトピックスを取り上げ、説明したテキスト。

地主敏樹『アメリカの金融政策—金融危機対応からニュー・エコノミーへ』東洋経済新報社，2006年。

アメリカの金融政策の変遷を簡潔に振り返った上で、主に1990年代初めから1996年までのアメリカの金融政策について、連邦公開市場委員会（FOMC）の議事録を利用しながら、その運営方法を詳細に描いている。アメリカの金融政策が、どのように決定され、実施されているのかがわかる。

福田慎一・照山博司『マクロ経済学・入門〔第3版〕』有斐閣アルマ，2005年。

GDP、消費と貯蓄、ケインズ経済学、経済政策の必要性など、マクロ経済学の基礎を丁寧に解説している。題材は日本経済だが、本章で説明した経済学の考え方を理解するのに有益。

## ◆第5章◆

アレント，H.著／志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫，1995年。

アメリカ独立革命によって、自由主義的な統治構造の形成（自由の創設）が成功した理由、およびフランス革命でそれが失敗した理由を政治思想的に分析。この本では、自由の創設という概念がやや不明確なため、同じ著者の『人間の条件』（同）の併読が望ましい。

ハイエク，F. A.著／気賀健三ほか訳『自由の条件Ⅰ－Ⅲ』（「ハイエク全集Ⅰ」5－7巻）春秋社。

古今の膨大な文献を参照しつつ、古典的な自由主義思想を包括的に記述。自由主義思想の詳細な内容は、日本の学校教育や思想書ではほとんど紹介されることがないため、貴重な著作である。

キンドルバーガー，C. P.著／石崎昭彦・木村一朗訳『大不況下の世界 1929－1939〔改訂増補版〕』岩波書店，2009年。

世界恐慌をイギリスからアメリカへの経済覇権の移行に伴う混乱だったと論じた名著。マクロ経済学の主流的理解とはやや異なる。金融危

機の性質については、小林慶一郎『逃避の代償 物価下落と経済危機の  
解明』（日本経済新聞社）も参照。

### ◆第6章◆

有賀夏紀・油井大三郎編『アメリカの歴史——テーマで読む多文化社会の  
夢と現実』有斐閣，2002年。

本章の内容をより詳しく説明した入門書。アメリカ通史を理解するう  
えでも適している。

渡辺靖『アメリカン・コミュニティ——国家と個人が交差する場所』新潮  
社，2007年。

アメリカの特徴的な9つのコミュニティのルポルタージュを通してア  
メリカ社会の変容を読み解く。

オバマ，B.著／白倉三紀子・木内裕也訳『マイ・ドリーム——バラク・オ  
バマ自伝』ダイヤモンド社，2007年。

オバマ大統領が政治家になるずっと前に書いた自伝。若き日のオバマ  
の生きざまや視点を通したアメリカ社会の現実が活写されている。

### ◆第7章◆

ユウジ・イチオカ著／富田虎男・桑井輝子・篠田左多江訳『一世——黎明  
期アメリカ移民の物語り』刀水書房，1992年。

アメリカにおける日系人史研究の新しい方向性を示した本の日本語  
訳。日系アメリカ人研究者にとって必読である。

南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学——エスニシティ，人種，ナ  
ショナリズム』彩流社，2007年。

「日系アメリカ人」というアイデンティティとエスニシティが歴史的  
かつ人為的に形成された経緯を解明する著作。アメリカ研究で不可欠な  
人種・エスニシティ理論と丹念な資料調査を合体させた意欲的な研究で  
ある。

飯野正子『もう一つの日米関係史——紛争と協調のなかの日系アメリカ  
人』有斐閣，2000年。

戦前から戦後にかけての日系人史を簡潔にまとめた好著。日本におけ  
る日系アメリカ人研究第一人者の研究の集大成といえる。入門書として

も最適である。

### ◆第8章◆

藤原聖子『現代アメリカ宗教地図』平凡社新書，2009年。

キリスト教，市民宗教，ニューエイジ，新宗教，マイノリティの宗教などのアメリカの多様な宗教を，政教関係，保守・リベラル，歴史という3つの軸により体系的に整理。参考資料にユーチューブ動画を多用しているのので，読みながらネットにあって動画を再生すれば，実際の信者の姿を見ることが出来る。

ガウスタッド，E.S.著／大西直樹訳『アメリカの政教分離——植民地時代から今日まで』みすず書房，2007年。

政治と宗教の関係について，ピューリタンの時代から現在までをカバーしているが，普通の歴史叙述とは異なり，いくつもの最高裁の訴訟を解説するというかたちで進められている。

大類久恵，『アメリカの中のイスラーム』寺子屋新書（子どもの未来社），2006年。

紙幅の制限のため，本章ではアメリカのマイノリティの宗教についてはほとんど取りあげることができなかつたので，参考図書を1冊。この本はアメリカの中のイスラム教徒を網羅的に，かつ歴史的に説明している。

### ◆第9章◆

荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会——身体をめぐる戦争』岩波書店，2001年。

女性の権利獲得という視点から中絶論争の歴史に迫った書。なぜアメリカで人工妊娠中絶が争点化するにいたったか，その背景も詳しく説明する。

バトラー，J.著／竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社，1999年。

ジェンダーのみならずセックスでさえもが，異性愛規範の中で社会的に構築されてきたことを説明した理論書。現代のフェミニズムやジェンダー研究のパラダイムをまったく書き換えるほど大きな影響を

及ぼした。

フックス, B.著／清水久美訳『ブラック・フェミニストの主張——周縁から中心へ』勁草書房, 1997年。

人種, 階級, セクシュアリティの視点から, 既存のフェミニズムの限界を批判した画期的な書。黒人女性の立場を理論的に解説した草分け的成果として知られる。

### ◆第10章◆

辻内鏡人『現代アメリカの政治文化——多文化主義とポストコロニアリズムの交錯』ミネルヴァ書房, 2001年。

多文化主義論争の論点、およびその現実面における影響を的確かつ丹念に捉えた論集。惜しくも夭逝した著者の遺稿集だが、「政治」と「文化」の激しい葛藤を描いて現在でも古びたところのない優れた思想書。

有賀夏紀『アメリカの20世紀』上下, 中公新書, 2002年。

社会史の観点から書かれた20世紀の通史。社会的マイノリティとマジョリティの間の関わりが平明な叙述のなかに浮き上がる。現代アメリカを理解するための基本文献のひとつ。

紀平英作『歴史としての「アメリカの世紀」——自由・権力・統合』岩波書店, 2010年。

「アメリカの世紀」とよばれる20世紀の諸問題を、政治思想の分野に集中して論じている。とりわけ革新主義知識人とアメリカの社会政策・社会思想の関わりを探求して余すところがない。

### ◆第11章◆

村田晃嗣『アメリカ外交——苦悩と希望』講談社現代新書, 2005年。

アメリカ外交への基本的な視座を提供しながら、とくに20世紀以降のアメリカ外交をバランスよく概観したもの。丁寧な文献案内も付されており、初学者には有用である。

佐々木卓也編『戦後アメリカ外交史〔新版〕』有斐閣, 2009年。

日本を代表するアメリカ外交の専門家たちが、第二次世界大戦後のアメリカ外交を解説したもの。日本語では最もスタンダードな教科書といえる。

村田晃嗣『現代アメリカ外交の変容——レーガン、ブッシュからオバマへ』  
有斐閣，2009年。

レーガン以降のアメリカ外交の変遷を，大統領のリーダーシップや個性に着目しながら，内政との関連で論じたもの。冷戦の終焉から「テロとの戦い」の開始までと湾岸戦争からイラク戦争までの時期を，「二重の戦間期」と定義している。

### ◆第12章◆

山本吉宣『「帝国」の国際政治学——冷戦後の国際システムとアメリカ』  
東信堂，2006年。

アメリカ政治および国際政治の大家によるアメリカ帝国論。帝国概念の明快な整理に基づいて，今日のアメリカの帝国性について分析的な位置づけを行っている。新保守主義に関する通史の部分もきわめて有用。カプラン，E.著／増田久美子・鈴木俊弘訳『帝国というアナーキー——アメリカ文化の起源』青土社，2009年。

本章に論じたアメリカ例外主義を論じた作品。移民国家としてのアメリカにおける内なる他者と植民地主義国家としてのアメリカの外なる他者とのイメージが互いに強めあう関係が鮮やかに描かれている。

ネグリ，A=M. ハート著／水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社，2003年。

ポストモダンの観点からの帝国論。単にアメリカがというよりも，世界が帝国化しているという観点に立っているが，そのなかでアメリカが占めている特別な位置についても注目すべき見解が含まれている。初学者には難解ではあるが，本書をめぐるはずで多くの解釈も試みられているので，挑戦してほしい。

### ◆第13章◆

小桧山ルイ『アメリカ婦人宣教師——来日の背景とその影響』東京大学出版会，1992年。

明治初期に日本にやってきた婦人宣教師たちの活動を，女子教育を中心に論じるもので，日本とアメリカの人的・文化的交流を描く。

ダワー, J.著／三浦洋一・高杉忠明訳『敗北を抱きしめて——第二次大戦後の日本人〔増補版〕』上・下, 岩波書店, 2004年。

アメリカの対日占領が, 日本人にとって大きな文化的衝撃でもあったことを論じる著作で, 終戦直後の時代状況を鮮やかに描き出す。

若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス——核密約の真実〔新装版〕』文藝春秋, 2009年。

沖縄返還交渉に佐藤栄作首相の密使として携わった本人の回想録で, 交渉過程の緊張感が伝わってくる。